

[原著論文]

須佐の郷学育英館—益田親施の時代を中心として—

土 井 浩

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

Ikueikan Academy in Susa, Choshu Domain

Hiroshi DOI

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

Abstract

During the Meiji Restoration, there was a faction of strong willed patriots called Shishi in the Choshu Domain. This was the result of the education which had been done throughout the Edo period. The schools representing that education were the domain school Meirinkan and the private school Shokasonjuku Academy by Shoin Yoshida.

In the Choshu Domain, we had some other excellent schools called Gogaku. They were built by the Mori clan and the upper samurai. They were proud of their facilities, many books, excellent teachers and students who were sons of the samurai. But little research has been done on these schools because there are only few sources whereas many researchers have focused on the Meirinkan and the Shokasonjuku.

In this study, I focus on the Ikueikan Academy, a Gogaku built and managed by the Masuda clan who reigned Susa (now a part of Hagi city) and were political top leaders in the Choshu Domain. What historical conditions led to it's foundation and what kind of education was practiced there ? How was the relation between the Ikueikan and the Shokasonjuku, and the exchange of the students ? How did the students of the Ikueikan contribute to the political movements during the Meiji Restoration ?

Keywords: Gogaku, Ikueikan Academy, Chikanobu Masuda the Lord of Susa, Exchange with Shokasonjuku Academy, Shishi in Susa

キーワード: 郷学、育英館、益田親施、松下村塾との交流、須佐の志士

1. はじめに

幕末維新期、長州藩は数多の人材を輩出した。それは、水準においても裾野の広がりにおいても他藩を凌駕していたとされる長州藩の優れた教育の賜物であった。その教育機関を代表するのが、官学では越前藩主松平慶永の政治顧問を務めた横井小楠をして「西日本一」と言わしめた藩校明倫館であり、私塾では吉田松陰(1830～59)が主宰した松下村塾であった。

しかし、長州藩には、明倫館や松下村塾の他にも、多くの人物を輩出した郷校¹⁾と呼ばれる一群の学校があった。郷校は大きく「給領主立郷校」「藩立郷校」「有志立郷校」の3つに分類される²⁾。給領主立郷校は一門八家³⁾や寄組などの上級武士がその家臣の育成のために藩校に倣って設けたものである。藩立郷校は主として領内の庶民を教育する目的で藩が設置したもので、内容は寺子屋とほぼ同じである。有志立郷校は地方在住の藩士や民間の有志が設立したもので、その経営形態から見て学制頒布後の小学校の前身とも見ることができる。設立の時期に関しては、藩立・有志立の郷校は、給領主立郷校に比べて大幅に遅れ、いずれも教育振興の機運が高まった天保期(1830～43)以降に開校された。こうした各種郷校のなかでも、給領主立郷校の範疇に入る一門八家が家臣団を育成するために設置した郷校は、充実した教育体制や優れた施設・設備を誇る「準藩校」ともいえる格式高い学校であった。本稿では、この一門八家が創建した郷校を他の郷校と区別するために、「郷学」という用語を用いることとする。

郷学は、すべての一門八家の給領地に設置された。そして、各地域で特色ある教育を展開するとともに、幕末維新期には尊王攘夷・討幕運動に関わった数多くの「志士」と呼ばれる人物を輩出した。

そのなかで、本稿では、奥阿武宰判須佐を本拠地とした給領主であり、永代家老として歴代当主が藩政の枢機に参画した益田家⁴⁾によって創建され、とりわけ第33代当主親施(1833～64)の時代に充実・発展した育英館を考察する。

育英館に関する基本史料としては、明治期に編集された「教育沿革史草稿」⁴⁾⁵⁾がある。その記述に基づき、これまで『山口県教育史』⁶⁾などの教育概説史や『須佐町誌』⁷⁾のような自治体史のなかで、育英館の概略が紹介された。専門的な研究としては、須佐郷土史研究会会長の西村武正氏が編集された『幕末志士の学び舎 須佐育英館』⁸⁾や『毛利藩の永代家老 益田氏と須佐』⁹⁾などがあり、それにはとくに親施時代に作成された学則を基に育英館が考証されている。しかし、それらは教育内容が中心であり、育英館が創建された歴史的背景、その教育体制が整備された親施

時代の育英館の状況、幕末の政治運動との関わりとの分析が十分とはいえない。

そのため、本稿では、まず幕府や藩の教育政策とも関連付けながら、育英館を含む郷学創建の歴史的背景について明らかにする。そして、幕末、学則が制定され施設・設備が拡充された親施時代の育英館について、教育の体制や仕組みを明らかにする。さらに、長州藩尊王攘夷運動の中心人物であった吉田松陰を庇護した親施について、彼の政治的行動を明らかにするとともに、松陰や松下村塾と交流した育英館出身の志士たちが、どのような政治活動を展開したのかについて明確にしたい。

2. 幕府・長州藩の教育政策と一門八家の郷学

江戸時代は、日本教育史上、飛躍的に学問や教育が充実・発展した時代であった。その初期の時代においてはまだ戦国の遺風が残存していたため、武士は、武術振興は求められたものの学問修得に対する要請は強くはなかった。しかし、元和偃武により「天下泰平」の世となり、武断政治から文治政治へと移り変わるにつれ、社会の支配者階級たる武士は、治世のために儒学などの学問修得の必要性が強く求められるようになった。それは、元和元年(1615)の「文武弓馬ノ道専可相嗜事」(元和令)¹⁰⁾が天和3年(1683)の「文武忠孝を励し、可正礼儀之事」(天和令)¹¹⁾のように、武士の規範たる武家諸法度に、儒学徳目の修得が要請されるようになったことからもうかがいすることができる。

すでに、江戸幕府初代将軍徳川家康は、儒学者藤原惺窩に学ぶとともに、その門人林羅山を幕府の儒官に任用して文治政治の基をつくるなどしていたが、3代将軍家光はこの林家に上野忍ヶ岡の地を与え、その孔子廟(聖堂)を親拝して学問尊重の範を示した。文治政治を本格化した5代将軍綱吉は、元禄3年(1688)に孔子廟と私塾を湯島に移して幕府直轄の聖堂学問所とし、羅山の孫信篤を大学頭に任じ儒学の発展に尽くした。そして、後日、この学問所は昌平坂学問所さらに昌平黌と改名され、充実・発展していった¹²⁾。

このような幕府の好学の姿勢は、全国諸藩にも大きな影響を与え、諸藩藩主は相次いで藩校を設立し、藩士子弟の教育に取り組んだ。藩校は各藩における学問の最高機関であり、施設・設備や教授陣・教育内容の両面において非常に充実していた¹³⁾。

ところで、長州藩主毛利氏は、京都の貴族であった大江匡房や広元を先祖にもち¹⁴⁾、伝統的に学問を重んじる気風があった。江戸時代、長州藩の学問教育の中心となったのは、藩校明倫館である。それは、享保4年(1719)に第5代

藩主吉元によって萩堀内に創建された。従来、家臣の「文武諸武芸稽古之儀」は、各々師匠の自宅に設けられた稽古場で実施されていたが、開校以来、同館で儒書・兵書の講義や諸武芸の鍛錬が行われることになった。吉元は、明倫館初代学頭となった小倉尚斎とともに幕府大学頭林家の塾に学んだ林家朱子学の正系であったので、藩校の構造、教育内容、儀式など、幕府の湯島聖堂を模範とした。明倫館の敷地は940坪(3,100㎡)に及び、孔子・顔子・曾子・孟子の木主を納めた大成殿を中心に建物が配置された。ここでは、上下の身分秩序を重んじ、「忠孝・礼儀」を尊ぶ幕府や藩から官学とされた儒学教育が重視された。また、文武奨励により、剣槍や弓馬など武術の鍛錬も熱心に行なわれた¹⁵⁾。

外圧の危機が迫る幕末の嘉永2年(1852)、第13代藩主敬親は、明倫館を萩江向の地に移転しこれを大きく拡充させた。当時、藩財政は逼迫していたが、藩主敬親は教育振興・人材育成こそ内憂外患の難局を切り抜ける道であるとの確信をもち、新明倫館の拡充・整備を断行した。新明倫館は、敷地坪数15,184坪(50,107㎡)という広大なもので、宣聖殿と呼ばれた聖廟を中心に、西側には、小学舎・手習所などを含めた学問修得のための施設、それも漢学中心の初等・高等教育施設が配置された。他方、東側には、槍場・撃剣場・射術場などの武芸修練場があり、後方には水練池、北方には3,020坪余の練兵場が設けられた。まさに、藩立の総合大学とも呼ぶにふさわしい規模の藩校であった。

新明倫館の教育内容の中心も、やはり漢学・儒学であった。しかし、新たな時代に対応すべく、洋学も積極的に受

容した。館内には済生堂(のちに好生館、さらに好生堂と改名)と呼ばれた医学所が設置され、西洋医学の研究・教育が行われた。なお、幕末になると世情を反映して、洋学は軍事面に傾いていき、西洋兵学の学所として博習堂が整備された。そこでは、海防や西洋兵学の研究および教育が推進された。明倫館における洋学は、海外知識の受容のみでなく、藩の軍制改革にも大きく寄与し、長州藩が新しい時代を切り開く力の源泉となっていく¹⁶⁾。

萩本藩明倫館における教育の影響は、長州藩支藩にも及んだ。天明5年(1785)には徳山藩が鳴鳳館(のち興讓館)を創建、その後、1787年(天明7)には清末藩が育英館、1792年(寛政4)には長府藩が敬業館、さらに岩国領にも弘化4年(1849)に養老館が設立された¹⁷⁾。これら支藩の藩校も、儒学や武術、文武両道を目指す教育が行われ、多くの優れた人材を輩出した。

ところで、「上のなすところ下これに習う」で、このような本藩・支藩における藩校の設立は、上級武士による郷学建立の動きを促進するものとなっていく。その嚆矢となったのが、一門八家の右田毛利家が寛永5年(1628)に防府に開校した時観園¹⁸⁾であった。その後も、18世紀には須佐益田家が享保年間(1716~35)に育英館を、阿川毛利家が宝暦3年(1753)に時習館を創建した。さらに19世紀の初めには、享和年間(1801~03)に厚狭毛利家の朝陽館、文化2年(1805)に吉敷毛利家の憲章館、文化6年(1809)に宍戸家の徳修館、文化11年(1814)に大野毛利家の弘道館などと郷学の設立が相次いだ。そして、やや遅れて天保期(1830~44)に、宇部福原家の維新館が設立された(表1)¹⁹⁾。

表1 一門八家の郷学一覧

一門八家	郷学	創設者	創立年	現所在地
右田毛利氏	時観園	毛利元法	寛永5年(1628)	防府市
益田氏	育英館	益田元道	享保年間(1716~35)	萩市
阿川毛利氏	時習館	毛利広漢	宝暦3年(1753)	下関市
厚狭毛利氏	朝陽館	毛利房晃	享和年間(1801~03)	山陽小野田市
吉敷毛利氏	憲章館	毛利房裕	文化2年(1805)	山口市
宍戸氏	徳修館	宍戸就年	文化6年(1809)	周南市
大野毛利氏	弘道館	毛利親頼	文化11年(1814)	平生町
福原氏	維新館	福原親俊	天保年間(1830~43)	宇部市

これら一門八家が所有する禄高は、各々1万石前後であったが、各郷学の規模は当然のことながら一様ではなかった。このうち、職員数・学生数・経費いずれにおいても最大の規模を誇り、他の郷学を凌駕したのが、一門八家筆頭家老にして熊毛宰判三丘の給領主宍戸家が設立した徳修館であった。この郷学では、公費で賄う寄宿生はもとより通学生にも昼食を支給するなど、手厚い支援体制が確立していた²⁰⁾。

なお、どの郷学も、明倫館や支藩の藩校と同様に、学問の中心は儒学であった。また、文とともに武も奨励され、学生は剣槍や弓馬の稽古に励んだ。文武両道の修得が求められたのである。ちなみに、これらの郷学から、学業成績優秀者を萩明倫館などへ遊学させることも少なくなかった。

3. 育英館の創建と発展

育英館は、右田毛利氏が創建した時観園に次ぐ2番目に古い郷学であり、その創建は享保年間であった。所在地は阿武郡須佐村字横屋町にあり、第27代益田家当主であった元道が須佐出身であり京都で名を成した品川希明に命じて書物の講義を行わせたのが始まりとされる。「育英」とは「英才を教育する」との意味であるが、育英館という建物の中で、正式な教育が始まったのは、享保20年(1735)とされている²¹⁾。

この時期長州藩では、藩校明倫館が創建された。また、河野養哲により、三田尻に儒学を教授する私塾越氏塾²²⁾も創建されており、藩内に教育振興を目的とした学校設立の機運が高まっていた時でもあった。

その後、歴代の益田家当主により、波田兼虎・山科眞通・小国融など須佐出身の著名な学者たちが、学頭として育英館に招聘された。彼らは、熱心に教育活動に取り組み、多くの英才を育成した。育英館も藩校や他の郷学と同様に、主として教授された学問は儒学であったが、第29代就祥の代には「佐江文学」²³⁾の名が各地に知れ渡るほど文学も発展した。

天保期(1830～43)、長州藩内では天保大一揆、対外的にはアヘン戦争における清国大敗の情報が伝わるなど「内憂外患」の状況が深刻化した。こうした危機に対応し、天保8年(1837)に藩主となった毛利敬親は、村田清風を登用し、藩体制の再編・強化を目的とする藩政改革を断行した。それは、藩政府主導による殖産興業・富国強兵策であり、これにより長州藩は西国雄藩としての実力を培った。

天保11年(1840)、清風は藩政改革の基本方針として「御改正ニ付申上候事」を敬親に上申し、七条からなる改

革の基本方針を示した²⁴⁾。その一つ、「撰拳」では「尋常之節は資格、非常之節は抜擢之事」として積極的な人材登用を主張した。また、「強兵之事」では「御家来中文武之学御せり立」として文武振興を目指した²⁵⁾。こうして清風は、文武両道に秀でた有能な家臣を育成するとともに、彼らを藩政の要職に抜擢し改革を推進しようとした。

その教育振興の一環として、藩校明倫館は堀内から江向へと移転され、施設・設備の大規模な拡充が行われた。なお、この新明倫館建設に清風を支援し大きな功績があったのが、第32代当主元宣と息子親興であった。彼らはまた自身の郷学である育英館の刷新を目指して、規則を改定し校舎の増築などについても検討した。しかし、父子共にその志を果たすことなく病没した²⁶⁾。

4. 益田親施の生涯

このような歴史を踏まえ、育英館の発展に大きく尽力した当主があらわれた。第33代益田家当主の親施²⁷⁾である。彼は育英館の改革・充実を図るとともに、松下村塾との交流も深めたため、この地から多くの「須佐の志士」が巣立っていった。

親施(写真1)は、天保4年(1833)、益田元宣の次男として萩堀内に生まれた。藩主敬親の一字を賜い親施、右衛門介、弾正とも呼ばれた。嘉永2年(1849)には、兄の親興が急逝し、直後に元宣も亡くなり、急遽17歳で家督を相続することになった。人となりは英邁豪気であり、多くの師について深く文武を学んだ。その兵学の師が3歳年長の山鹿流兵学師範であった吉田松陰であり、彼は松陰から尊王攘夷思想など多くの感化を受けた²⁸⁾。他方、親施も密航を企て国事犯となった松陰や松下村塾の塾生たちを庇護した。



写真1 益田親施像(萩市須佐笠松神社)

親施が活躍したのは、ペリー来航以降における激動の幕末の時代である。その渦中であって、永代家老益田家の当主という家格・家柄もさることながら、人格・識見ともに

秀でていた親施は、藩主敬親の厚い信任を得た。そして、嘉永6年(1853)にペリー来航後幕府から命ぜられた江戸湾を防衛する相州警衛の最高責任者たる相模国御備場惣奉行に就任したのを手始めに、その後も当職・当役などの藩政最高の要職を歴任した。

無論、親施はその立場からして、激動する幕末の政局に松陰門下生のような直接的な関与を行うことはなかった。しかし、たとえ、下級武士層から上申されたものではあっても、有志の意見や陳情、建白類に対しては真摯に耳を傾けた。そして、時にそれを藩の政策や政治路線として反映させるなど下級武士の政治活動を支援した。

また、過激な尊王攘夷運動に対しても、松陰を庇護したことからもわかるように理解を示した。これに対して、松陰は次の2つの書簡の中で、尊王攘夷の思想とともに運動の支援者として親施をきわめて高く評価している。前者は安政5年(1858)9月28日公卿大原重徳宛て書簡、後者は安政6年(1859)9月11日水戸藩郷土堀江克之助に宛てた書簡である。ちなみに、この両書簡の中に登場してくる浦較負とは、親施と同様、幕末期藩政の枢機に参画した上級武士で、松陰や尊王攘夷志士たちの庇護者であった人物である²⁹⁾。

弊藩の儀、当職・当役と申す兩人、家老中の要職に之れあり候処、当職は国事を総撰仕り候故、世に国相と唱へ申し候、当時浦較負と申す者相勤め候。当役は寡君輔弼の任にして江戸へ従行仕り候哉、世に行相と唱へ申し候、当時益田彈正と申す者相勤め候。兩人共孰れも有志の者に候処、浦は老輩にて其の家来忠義の者殊に盛んに御座候。益田は行年二十六、七歳。英気活発の人物にて、当時家老中第一流の人材に御座候。私門人に付き、幽囚中にて兼ねて志を通じ居り候事に付き、勤王の一義に於ては常に其の志を同じ候義に御座候³⁰⁾。

小生住居は萩の東隅にて松本と申す所にて、同志の会所を松下村塾と申し候。…去年已来右塾中のもの或は江戸へ遊び、又は京へゆき、又国元にて激論を発し俗吏の爲めに罪せられ候もの、小生ともに十三四人も之れあり、少しも成功は之れなく候へども尽力は致し候。此の十三四人を罪し候は江戸家老の手に出で候所、浦氏の手にては始終助け候形に御座候。但し江戸家老も益田彈正と申して年少ながら家老中にては人物にて、小生門下故、左まで敵讐の訣には之れなく候へども、時勢に迫り詮方なく他の家老共へ申訳の爲めにかく取計ひたりと申し、甚だ恥ぢて居り候次第に御座候³¹⁾。

元治元年(1864)、ついに親施自らが藩の面目をかけて

出陣せねばならない事態が出来た。これは、前年の文久3年の八月十八日の政変で京都を追われた長州藩が、この年6月に起こった池田家事件を契機に入京し、朝廷での勢力回復を図るために京都御所に押し寄せたことから始まった。禁門の変である。長州藩は、親施とともに福原越後・国司信濃の3家老が軍を率い、7月19日早暁、三方から御所に攻め寄せた。しかし、会津・桑名・薩摩などの兵に阻まれ交戦、戦いは長州軍の惨敗に終わった。

敗軍の将となった親施は帰藩し、8月2日免職となり、5日給領地の須佐に帰郷した。この敗戦により、藩は「朝敵」となり、幕命により征長軍が発せられた。このような長州藩にとっては、その存亡にも関わる難局の下、藩政の主導権は保守派に移った。彼らは社稷の安泰を願い幕府への恭順を進めていく。こうして禁門の変における藩の責任を一身に負わされた3家老は幽閉され、藩政府は彼らの死罪を決定した³²⁾。そして、11月11日から12日にかけて、彼らは自刃を命ぜられた。

親施は幽閉されていた徳山の惣持院で自刃した³³⁾。享年32。動乱の時代に散った波乱の生涯であった。

5. 親施時代の育英館

幕末の激動の時代に長州藩家老として多忙を極めていたが、親施は育英館の教育振興にはことのほか熱心であった。彼自らが公務の暇をみては、育英館を訪問し、時事を論じ武術に励んだ。また、家臣の子弟とともに父兄にも大いに文武を奨励し、文武尊重の機運を醸成した。親施は、益田兼済を育英館都合人に任命し、学舎の増改築と制度の改革を行わせた。育英館の校地総面積は総反別3反歩で、その中には、日進堂という講義室、武道場、敬勝斎と呼ばれる学生寮、教師や他国修行者が入る晩香堂などの建物、馬場や弓道場までが整備された³⁴⁾。このうち、現存している遺構としては、「育英館正門」(写真2)とそれに掲げられていたと思われる「扁額」³⁵⁾だけである。



写真2 育英館正門(萩市立育英小学校)

また、江戸で学問を積んだ小国融蔵³⁶⁾を抜擢して学頭とし、教育内容も充実・発展させた。嘉永5年(1852)には「育英館規則」が完成するとともに、「育英館直捌文武引立方之細目」³⁷⁾(写真3)も著され、名実ともにここに育英館が確立した。

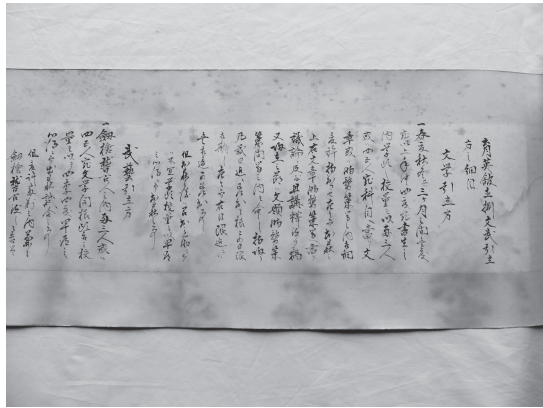


写真3 育英館直捌文武引立方之細目
(親施直筆、須佐歴史民俗資料館蔵)

育英館の教育の中心は、明倫館や他の郷学と同様、大学・中庸・論語・孟子の四書および詩経・書経・春秋・易経・礼記の五経などの儒学の経典を学ぶことであった。忠孝を第一の教えとする儒学は人倫の本を務めるものであり、幼年時より学び続けることが肝要とされた。祭儀においても、毎年春秋2季(二月上丁日、八月上丁日)に举行される儒学の祖である孔子の功績を崇め奉る儀式である積業が大切であり、当日諸稽古は休業となり教師・学生全員がこれに参加した。他方、親施による学制改革以後は、武にも力が注がれた。遠方から高名な武術の師を招聘しその修行にも励むようになった。安政元年(1854)には、久留米の武藤何某・三田尻の武田何某が招かれ、撃剣や遊泳等が伝授された。この頃の職員数は、学頭1名・助教2名・生長1名・句読師4名・育英掛1名・御目代1名・剣術頭取2名・槍術頭取2名、計14名であった。弓馬、習礼、砲術、遊泳などには頭取を置かず、その技術に長じている者を引立に選んで教授した³⁸⁾。

育英館には、益田家に仕える家臣の嫡子・庶子が入学した。その数およそ50名、年間経費はおよそ2貫42文目5分であった。彼らは、7・8歳頃から素読や習字を始め、8歳の春に学頭へ入門した。その後は各年齢で試験が実施(毎年春に1回)され、合格すれば上級の段階へと進級した。10歳の試験で孝経・大学を修了すれば小学初等生となり、日進堂に出席した。12歳の試験で論語・孟子・中庸の科目を修了すれば、小学中等生となった。さらに、14歳の試験で五経、小学科目を修了すれば、小学上等生となった。以後は館中通稽古を行い、翌春には敬勝斎と呼ばれた学生

寮へ入寮し昼夜文武に励むことになった³⁹⁾。

16歳の試験では、孝経・大学の両書を講義し、孔子と弟子たちの言行や逸話に対して答案を提出することが課され、修了すれば大学初等へ進んだ。18歳の試験では、大学・論語を講義し、国語に関する答案を提出することが求められ、修了すれば大学中等へ進んだ。20歳の試験では、孟子・中庸を講義し、左伝に関する答案を提出、そして22歳の試験では、詩経・書経を講義し、歴史綱鑑についての問題に解答して大学上等生となった。最後の試験は24歳、易科、対書対策などを仕上げ、敬勝斎を退寮することになった。

なお、退寮後は公私の務めが多忙になってくるが、学問に励むことは大切なことであり、たとえ在役中でも公用の暇があるときは、学校に出でることが求められた⁴⁰⁾。

こうして、学制改革により学校としての体制を整備した育英館の名声は近隣諸藩にも広まり、諸藩の多くの士が育英館を訪れるようになった。

6. 育英館と松下村塾の交流

吉田松陰は長州藩の山鹿流兵学師範であった。当時藩の兵学師範には吉田家の他、多田(北条流)・大西(北条流)・森重(合武三島流)などの諸家があり、藩主をはじめ藩士は誰かに師事しなければならなかった。親施は嘉永2年6月に松陰に入門し、後に目録を受けている。

これが縁故となって松陰と親施の親交が始まった。松陰にとって、親施は藩政の要職に就いていた上級武士であったが、兵学の弟子でもあったため、遠慮なく意見具申を行つた。他方、親施は松陰の意見には何事によらず真摯に耳を傾けた。

このような松陰と親施の関係もあり、しかも地理的にも近距離ということも幸いし、後日松陰が松下村塾(写真4)を主宰した時には、育英館との間に活発な人的交流が生まれた。



写真4 松下村塾(萩市松陰神社)

それは、安政5年(1858)2月、荻野隼太⁴¹⁾が松下村塾にやってきたことから始まった。荻野は育英館学頭であった小国融蔵の門下生であった。荻野は当時沈滞し活気がなかった育英館を奮い起こさせる指針を村塾に求めようとしていた。はたして村塾の熱気に接した荻野は感動し、是非入塾したいと松陰に依頼した。松陰と旧知の間柄であった小国も仲介の労をとった。荻野が村塾生として活動し始めたのは3月11日からであった。

やがて親施からの依頼もあり、荻野は村塾生を育英館に派遣して学生交換ができないか、松陰に依頼した。その計画が進展し、3月下旬、松陰は塾生たちを須佐へ送った。須佐に赴いたのは、教師格の久保清太郎と富永有隣の2名、塾生は、久坂玄瑞、伊藤博文、品川弥二郎、山田顕義、中谷正亮、中谷茂十、福原又四郎、岡部富太郎、有吉熊治郎、天野御民、栗田忠蔵、増野徳民、滝弥太郎、馬場春海の14名であった。いずれも、後日、長州藩の尊王攘夷・討幕運動の推進者となる若者たちである。彼らは育英館の晩香堂などに滞在し、育英館学生と寝食を共にして勉学に励むとともに時世を語りあった⁴²⁾。

4月1日、松下村塾生は萩へと帰った。しかし、松陰は、育英館が弊習にとらわれているとみなし、この派遣については成果があったとは思わなかったようである。すると、今度は、育英館から益田邦衛、本尾官治、荻野隼太、内藤勝重、大谷樸助、宇野省三、宅野定義の7名が来萩し松下村塾に入塾した。この派遣は松陰も満足したようである。4月29日、松陰は彼らが帰郷するにあたり、村塾生4名が須佐への行を共にした。なお、松陰は別離の際に送序「須佐七生の邑に帰るに贈る言」を与えたが、それには次のように述べられている⁴³⁾。

須佐の益田邦衛以下七名、蹶起し来りて吾が塾に寓す。吾れ首として語るに時務俊傑の説を以てせしに、七名皆以て然りと為せり。其の將に去らんとするに及んで、吾が党の士四名復た往きて之れに従ふ。吾れ其の兩つながら相和諧するを喜ぶや、叙を作りて之れを送らんと欲す。

ちなみに、松陰は大谷に特別な期待を持ったとみえて、彼が野山獄における思索の間に執筆し、松下村塾では塾生の指針とされた「土規七則」を与えている⁴⁴⁾。

育英館と松下村塾の交流はこの3回で終了した。しかし、この交流は、封建的秩序の維持を是とする儒学中心の教育を行っていた育英館側にとっては非常に有意義なものであった。この交流によって、松陰が醸成した尊王攘夷思想の普及・啓発が行われたからである。この7年後、大谷が禁門の変の責任を取り自刃した親施の意思を継ぐため回天軍を起こしたのも、また幕長戦争時に須佐から多くの

兵士があらわれたのも、松陰による教育の影響があったと思料されるのである。

7. 尊王攘夷運動に活躍した育英館出身の志士たち

禁門の変の責任を取って親施が自刃したことは、須佐の益田家家臣団に憤激を引き起こした。その中心となったのが、育英館の小国融蔵、大谷樸助や河上範三⁴⁵⁾らであった。彼らは殉死の決意を益田家の領政を司る邑政堂に願い出るが、許されず蟄居を命ぜられた。当時の邑政堂は、親施の母親である仙相院や益田家家老らが実権を掌握しており、彼らは幕府に恭順する藩の方針に従うことこそ「お家存続」にとって最重要と信じていた。

しかし、元治元年12月15日、長府功山寺で高杉晋作が拳兵し、諸隊を巻き込み勢力を拡大してくると、慶応元年(1865)2月、大谷や河上ら9名は須佐を脱出し諸隊へと走った。そして、諸隊の協力の下、須佐の心光寺で、大谷を総督とし36名が参加して回天軍(写真5)を組織した⁴⁶⁾。

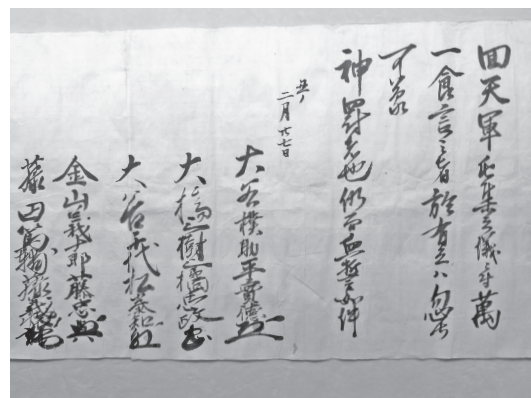


写真5 回天軍血判状(須佐歴史民俗資料館蔵)

一方、この動きを警戒した邑政堂は回天軍に対抗して北強団を組織、須佐の地は両者の一触即発の状況となった。こうした状況下、2月28日、仙相院は、大谷・河上・津田常名3名を邑政堂へと召喚し、主家に反逆したとの理由で、自宅幽閉を命じた。そして、3月1日、親施の嫡子精治郎(のちの益田家第35代当主精祥)の名前で、大谷と河上に切腹が命ぜられた⁴⁷⁾。

その後、藩では同年2月に革新派が政府の主導権を握り、3月には藩論が「武備恭順」へと転換した。須佐でも、邑政堂・北強団は力を失い、来るべき幕府との戦いに備えて、軍事力強化が図られた。藩政府では、大村益次郎が軍制改革に取り組み、1,000石以上の家臣の兵は大隊に編成され、育英館で文武に励んだ益田家家臣団は北第一大隊として編成された⁴⁸⁾。

慶応2年(1866)6月、幕長戦争⁴⁹⁾の火ぶたが切つて落と

された。この戦争は「四境戦争」とも言われるが、その境の一つが石州口、つまり益田家の領地の境であり、益田家の旧領地である益田での戦いであった。石州口の戦いの総司令は清末藩主毛利元純が務めたが、元純は長州藩内に留まり、実際の指揮は大村益次郎が参謀を兼務して担当した。北第一大隊は、総監に益田家家老の増野又十郎の下、6月15日に出陣した。石州口の戦いには、須佐兵の他に、南園隊・精鋭隊・清末藩育英隊などが参戦した。

長州軍は翌16日には浜田藩領の益田へと進み、16・17日両日にわたって福山藩・浜田藩兵からなる征長軍と激戦を交えた。戦いは、万福寺・医光寺・勝達寺に立て籠もった征長軍が、前に益田川、後ろに秋葉山という地の利を生かして抗戦したため、長州軍は苦戦した。この苦境を切り開いたのが、北第一大隊と清末藩育英隊であった。両部隊は、困難をおかして征長軍背後の秋葉山を攻撃して占拠し、「須佐大隊敵營之後山え間道より登り、下ヶ矢にて打出ス。玉尽く敵え当り、前之右之如く進退度を失ひ」と、山上から攻撃して成果をあげ、征長軍を正面と背後から追い詰める形となった。その様子を福山藩兵士は、「敵は勝達寺の目上の山へ緊しく攻め懸けしかば、山上なる我兵は耐えかね、銃手散乱せしかば、我が銃隊長及び長槍の輩も余儀なく引き退かざるを得ざる」と苦境に陥った様子を述べている⁵⁰⁾。こうして、正面及び背後の山から攻撃され追い詰められた征長軍は、益田から退却し、この方面の拠点であった浜田に向けて敗走した。

その後も、征長軍は敗退を続け、7月17日、浜田藩主松平武聰は浜田城から退去、翌18日には同城は自焼した⁵¹⁾。こうして、石州口の戦いは長州軍の大勝利に終わった。

幕長戦争は、四境のどの戦場においても、長州軍が勝利を収めた。幕府は、この戦いに全国31藩からおよそ15万の兵を動員したが、長州一藩に惨敗しその権威は失墜した。諸大名は幕命に従わなくなり、翌慶応3年(1867)、幕府は倒壊した。

8. お わ り に

かつて一門八家・永代家老益田家の給領地であった須佐は、萩市北東部に位置し、島根県境にも近い日本海に面した静かなたたずまいの町である。本稿では、江戸時代この地で益田家が創建した育英館と命名された郷学について、その創建にいたる歴史的背景、それが大きく発展した親施時代の教育体制や仕組み、さらには幕末の尊王攘夷・討幕運動との関わりなどについて考証し、明らかにした。

育英館創建に至る歴史的背景としては、当時幕府(昌平坂学問所)や長州藩(萩明倫館)で推進されていた武士層

に対する儒学を中心とした積極的な教育振興の動きが挙げられる。そして、育英館は幕末に益田家当主となった親施により、学則を整え、施設・設備を整備するなどして大きく拡充・発展した。親施はまた長州藩における尊王攘夷運動の中心人物であった松陰を庇護し、松下村塾と育英館の交流促進を図るなどした。その交流は、須佐で回天軍を結成し尊王攘夷運動の推進に努めた大谷樸助や、宇部維新館の学頭となり尊攘思想の普及・啓発に努めた佐々木貞介、さらには幕長戦争石州口の戦いで活躍した北第一大隊の隊士たちなど多くの「須佐の志士」を生み出すことにつながった。

長州藩の郷学については、史料が乏しいこともあり、これまでその全体像はほとんど解明されていない。そのため、今後は、他の一門八家が主宰した郷学に関する史料の悉皆調査を行い、綿密な実証研究を行うことが課題となってくる。そうした調査・研究の推進により、各郷学の共通点とともに差異点が明らかになってくるだろう。本稿の研究対象とした育英館も、他の郷学との比較考量をとおして、さらに新たな知見が得られるものと思料する。

謝 辞

本研究における関係史資料の調査や閲覧などに関して、須佐歴史民俗資料館や須佐総合事務所からご支援とご協力をいただきました。とりわけ、益田家と育英館に対して有益かつ適切なご指導・ご助言をいただきました須佐郷土史研究会会長であられる西村武正氏には、深甚の謝意を表します。

注、引用・参考文献

- 1) 文部省: *日本教育史資料3*によると、幕末維新时期、長州藩には20の郷校があった。富山房, 1890, 445-470.
- 2) 財団法人 山口県教育会: *山口県教育史*, 財団法人 山口県教育会, 1986, 207.
- 3) 藩主毛利家に仕える藩士中最上層の武家とされ、世々家老職に就く。宍戸家、右田毛利家、厚狭毛利家、吉敷毛利家、阿川毛利家、大野毛利家の一門六家に、永代家老の益田家と福原家を加えて一門八家と呼ばれた。石川卓美編: *山口県近世史研究要覧*, マツノ書店, 1976, 16.
- 4) 幕末期、益田家は、藩内9か所(切畑・小鯖・鈴野川・上小川・上田万・下田万・嘉年・弥富・須佐)に12,040.710石の地方地行地を所有していた。石川卓美編: *防長歴史用語辞典*, マツノ書店, 1986, 452. 益田家の系図については、西村武正編: *毛利藩の永代家老 益田氏と須佐*, 萩市須佐公民館, 1997, 209を参照。

- 5) 県庁文書A 戦前教育50,山口県文書館蔵。本書第4冊は、郷校などの「家老以下私立学校」が掲載されている。
- 6) 山口県教育会が1925年(大正14)に発行した本書上巻には、明倫館や郷学・郷校が紹介されている。なお、本書は第一書房から1982年に復刻版が刊行された。
- 7) 須佐町誌編集委員会,須佐町,1993,593-599.
- 8) 西村武正編:幕末志士の学び舎 須佐育英館,須佐町教育委員会,1994.
- 9) 前掲注4)益田氏と須佐。
- 10) 高柳真三・石井良助編:御触書寛保集成,岩波書店,1989,1.
- 11) 同上,8.
- 12) 名倉英三郎:江戸府内の諸学校と諸藩邸内学校,東京女子大学附属比較文化研究所紀要第45巻,東京女子大学附属比較文化研究所,1984,71-72を参照。
- 13) 和島芳男:昌平校と藩学,至文堂,1962,112-167を参照。
- 14) 毛利家系図については、時山弥八:増補訂正 もりのしげり,マツノ書店,2015,1-7.
- 15) 前掲注2)山口県教育史,156-161を参照。
- 16) 小川國治・小川亜弥子:山口県の教育史,思文閣出版,2000,116-119及び山口県:山口県史 通史編 幕末維新,山口県,2019,133-141を参照。
- 17) 前掲注14)もりのしげり,175-177.前掲注2)山口県教育史 161-163.
- 18) 時観園については、前掲注6)山口県教育史上巻,121-123及び防府市史編纂委員会:防府市史 通史II・近世編,防府市,1999,762-764を参照。
- 19) 前掲注1)日本教育史資料,3,445-470や前掲注2)山口県教育史,164などを基に筆者が作成。
- 20) 徳修館記(写),杉村洋治氏蔵及び前掲注2)山口県教育史,163.
- 21) 前掲注8)須佐育英館,14.
- 22) 越氏塾については、前掲注6)山口県教育史上巻,107-120を参照。なお、長州藩は、河野養哲による開塾以来この塾を援助し、彼亡き後も支援を続けた。他方、この塾で学んだ学生たちのなかから、明倫館の都講となるなど藩教育に寄与する者もあらわれた。
- 23) 須佐の入江から須佐のことを「佐江」と呼んだ。前掲注8)須佐育英館,15.
- 24) 毛利家文庫11政理140 流弊改正控,山口県文書館蔵。山口県:山口県史 史料編 幕末維新2,山口県,2004,497-500.
- 25) 同上。
- 26) 第32代当主の元宣は、当職あるいは当役として改革担当者となった清風を助け、長州藩天保改革推進に寄与した。なお、嘉永2年(1849)3月に新明倫館は完成し開校式を行ったが、元宣は翌4月に病没した。前掲注4)益田氏と須佐,127-130を参照。
- 27) 親施の履歴については、山口県文書館が所蔵する以下の諸史料が参考になる。毛利家文庫73藩臣履歴1毛利元徳旧臣家老履歴書(1),同2益田福原国司清水四大夫履歴(1),同5諸臣事蹟概略(2),同21忠節事蹟(2).
- 28) 田中助一:益田親施,明治百年記念益田親施公銅像建設期成会,1970,20-23.
- 29) 浦鞆負の政治的行動については、土井浩:幕末期長州藩家老浦鞆負に関する政治史的考察,東京理科大学紀要(教養篇)第54号,東京理科大学,2022,285-303を参照。
- 30) 財団法人 松風会編:吉田松陰撰集—人間松陰の生と死—,財団法人 松風会,1996,521.
- 31) 山口県教育会編:吉田松陰全集第8巻,大和書房,1972,389-390.
- 32) 毛利家文庫65接幕一件17,三大夫一件記録(上),山口県文書館蔵。
- 33) 親施は、藩政府から「不忠不義」の罪状により死罪の宣告を受けた。だが、「よしあしのわか名は何かいとましかねてそ君にささけつる身を」という辞世をよみ、従容として死に臨んだ。この和歌が記された原本は、現在、須佐歴史民俗資料館に展示してある。
- 34) 前掲注5)教育沿革史草稿4。なお、これには育英館の詳細な校舎図面が掲載されている。
- 35) 須佐歴史民俗資料館蔵。
- 36) 小国については、山口県文書館所蔵毛利家文庫に収められている73藩臣日記21忠節事蹟(4),同22勤王諸士履歴概略,同70勤王功労者履歴(1)が参考になる。
- 37) 須佐歴史民俗資料館蔵。
- 38) 前掲注5)教育沿革史草稿4.
- 39) 同上。
- 40) 同上。
- 41) この相互交流に大きな役割を果たした荻野は、後日、宇部の給領主福原家が主宰した維新館の学頭佐々木向陽の養嗣子として迎えられ、佐々木貞介と改名した。彼は、養父が文久3年(1863)に亡くなると、同館の新学頭に就任し、福原家家臣子弟の教育に熱心に取り組んだ。宇部市史編集委員会:宇部市史 通史篇上巻,宇部市,1992,998-999及び1043.維新館に尊王攘夷思想が広まっていった理由としては、この時期尊王攘夷で藩是を確定した長州藩の藩内状況とともに、新学頭となった荻野の存在の大きさが考えられる。なお、彼

は禁門の変時には、越後率いる福原軍の参謀として戦いに参加した。諸士中戦争度数書出草案、*福原家文書8-107*,渡辺翁記念文化協会蔵・宇部市学びの森くすのき寄託。渡辺翁記念文化協会:*福原家文書下巻*,宇部市立図書館,1995,524-525.

- 42) 前掲注8)須佐育英館,88-89.
- 43) 前掲注30)吉田松陰撰集,479.
- 44) 前掲注8)須佐育英館,89-90.なお、この七か条からなる指針は、人間の真のあり方、武士たる者の生き方について松陰が明示したものであった。第一則は人間の人間たる所以を、第二則は皇国民の立場を、第三則と第四則は個人としての士道のあり方が述べられ、第五・六・七則では士の道を確立するために心がけるべき事柄が示された。これの最後に、「志を立てて以て万事の源と為す。交を択びては以て仁義の行を輔く。書を読み以て聖賢の訓へを稽ふ」という「立志・択友・読書」の三つを以て七則を確実に修得するための不可欠の端緒であることが述べられている。前掲注30)吉田松陰撰集,252-254.
- 45) 大谷と河上については、毛利家文庫73藩臣履歴21忠節事蹟(3),同22勤王諸士履歴概略,山口県文書館蔵を参照。
- 46) 前掲注4)益田氏と須佐,186.
- 47) 同上,186-188.
- 48) 長州諸隊一覧,山口県:*山口県史 史料編 幕末維新6 別冊*,山口県,2001,16-17を参照。
- 49) 幕長戦争については、山口県:*山口県史 史料編 幕末維新4*,山口県,2010及び前掲注16)*山口県史 通史編 幕末維新*が詳しい。また、同戦争石州口の戦いに関しては、上記書籍とともに、三宅紹宣:*幕長戦争石州口の戦い*,*山口県史研究第17号*,山口県史編さん室,2009,1-18及び同:*幕長戦争*,吉川弘文館,2013,161-194を参照。
- 50) 同上,*幕長戦争*,172-174.
- 51) 同上,*幕長戦争*,188.